

匪賊たちの系譜学・第2部

山崎カヲル

はじめに

本稿の第1部（『コミュニケーション科学』第32号，2010年）で，私たちはヨーロッパにおいて匪賊と呼ばれてきた存在が，歴史的には異なった出自を持つふたつの系譜，すなわち，もともと別個に成立した法外性と集団性という規定が，その後の歴史過程の進行のなかで縊りあわされて形成されたものであり，それゆえに匪賊はこの両者が交差する点で定義されていることを明らかにした。そのことによって，広範な地域に広がって存在する匪賊は，少なくともヨーロッパやそれが影響を与えてきた諸地域に関しては，こうした一定の基本特徴によって定義可能となる¹⁾。

ここで法外性に関して，前回では指摘し忘れたいくつかの点について，若干付言しておきたい。

ポール・ヴァンダーウッドは19世紀メキシコの匪賊活動を展望した『無秩序と進歩』の第2版（1992年）への「序言」において，さまざまな批判を浴びた自己のテーゼ（匪賊は金銭獲得と社会的上昇を目的として犯罪を犯す人々にすぎない）を擁護するとともに，匪賊を例外状態に結びつけている。

「例外状況」（Ausnahmezustand, state of exception）とは，法治を基本原則とする近代国家において，蜂起・内戦等を理由にして，特定の地域を，さらには全国までを，憲法の外部にあると宣言し，法の適用を一時的な停止状態に置くことである。「例外状態」はすでにカール・シュミットによって『政治神学』（1922年）において「主権者とは例外状態に関して決定する」もののだとして，主権概念との密接な関連を指定され，さらにヴァルター・ベンヤミンの重要な分析（「暴力批判によせて」）を経たあと，最近ではジョルジョ・アガンベンの手で歴史的・理論的な分析がなされている。アガンベンが特に注目しているのは，2001年9月11日以降，米国政府がグアンタナモ基地その他において，「タリバーン」だという口実で法的根拠がまるでないままに勾留している人々である。彼らはいかなる意味でも法の支配のもとになく，ジュネーヴ条約だけでなく，米国のすべての法律が適用されない存在であって，法治国家において法が無化された領域の住民という，きわめて特異な地位にある人々である。それはアガンベンが強調しているように，ナチス時代に強制収容所に送られたユダヤ人と同等な扱いを受けている（Agamben 2003）。ごく最近，ボストン・マラソンで爆弾を仕掛けた

として逮捕された青年が、ミランダ通告（逮捕に当たって、自分に不利な告白をしないでよいとし、また、弁護士を選任する権利も主張できる）の範囲外とされたことも、覚えておきたい。

ヴァンダーウッドは「メキシコで導入されたような例外法規は、支配集団がどのように匪賊活動を理解していたのかを、よく教えてくれる」と述べて、匪賊が法外へと放逐されたことが、憲法上の例外規定とかかわっていたと主張している。(Vanderwood 1992: xxxiv-xxxv)。だが、それはまったくの誤りである。法外へと特定の人物を追いやることは、例外状態とはおよそ結びつかないからである。

スペイン語圏の近代史では、例外状態という規定は1812年のカディス憲法ではじまって、独立後のラテンアメリカ各地で採用され、メキシコでも1857年憲法第29条²⁾で規定されていた。スペイン語圏での例外状態の具体的な歴史的展開に関しては、幸いにしてブライアン・ラヴマンの包括的な研究(Loveman 1993)がある。

とはいえ、アガンベンが簡潔に要約してくれているように、どの国においても例外規定はほとんど常になんらかの地域を対象にしているであって、なによりもまず特定の地域（それは時には全領土にさえ及ぶことがあるが）における憲法上の諸権利の停止を意味していたのである³⁾。

確かに、特定の集団（ナチス時代のユダヤ人や今日では「タリバーン」だとされた人々）が、法律の保護から外されて自由な殺害を許されることはあった。匪賊集団に対する種別的な扱いをかなり早期に撤廃していたイングランドでも、特定集団を法外者とする法的規定は、匪賊とは別個のかたちでしっかりと生き延びていた。それは1723年5月に制定されたBlack Actにはっきりと現われている。この法律はいわゆるジャコバイト叛乱への恐怖と、ロバート・ウォルポールの貪欲な政治的野心、国王ジョージ1世の異様なまでの狩猟好き、それに森での民衆の慣習的経済活動への権利の侵食とそれに対する広範な反撥などが重なった政治的・社会的過程の産物として作られたものであって、各地の王領や貴族の土地で、夜に顔を黒く塗ったうえ武装して鹿を密猟する集団(Blacksと名指されている)が対象とされていた(黒い顔は後述するペドロ・カルボネロたち炭焼きとも共通するし、18世紀にマーストリヒトを含むムーズ河下流を荒らし回っていたBokkerijderと呼ばれる匪賊集団も顔を黒く塗っていた⁴⁾)。Black Actでは、処刑の対象になる人々を、つぎのように定めている。

「悪しきもくろみを持ったなんにんもの無法な連中が、近年Blacksという名前のもとに結集して、鹿を盗み殺したり、野生の鳥獣棲息地や魚池を荒らしたり、植林された樹木を切り落としたりといった不法な行為を行ない、数をなして剣、火器、その他の攻撃的武器を携え、いくにんかは顔を黒く塗ったり変装して、国王陛下に属する森、それに陛下の多々ある臣民たちの猟園において密猟をなし、鹿を殺して運び出し、鳥獣棲息地、川、魚池を荒らしまわり、樹木を切り倒している。」(Thompson 1975: 270)

それまではおよそ極刑とは無縁だったエディンバラやハンプシャーでの夜間の鹿の密猟などが、この法律によってタイバーン処刑場での公開絞首刑で処罰されることになるのである⁵⁾。重要なのはそのさいに、かつては匪賊に向けられていた処罰の手続きがそのまま再現されていることである。つまり、犯人の名指しのうえでの法廷への出頭要求、それが拒否ないし無視された場合の重犯罪 (felony) 規定の適用、そして逮捕されたさいの裁判抜きの処刑可能性である (Ibid: 151-2)。匪賊への伝統的な処罰形式はこのように、たとえ匪賊というカテゴリーが法的には消滅したあとでも、別の次元で再生産されることがある。

ヴァンダーウッドに話を戻すが、メキシコでも例外規定は基本的には対人的なものではなかった。1848年のメキシコ憲法はそれゆえにわざわざ例外状態における人権の停止が「特定の個人に限定されることはできない」(y sin que la suspensión pueda contraerse a determinado individuo) ことを明記しているのである (Tena Ramírez 1978: 610)。もちろん、現実にはこのような註記は無視され、叛徒・匪賊とされた人々は、いたるところで略式裁判さななされずに処刑されていた⁶⁾。とはいえ、例外状況は「匪賊」に対する過酷な諸措置 (ad hominem な) とは直接には関係してはいない。後者は憲法による根拠を持たない、まったく臨時的な法執行の産物にほかならない。

このような匪賊および匪賊活動が持っている両義性が、今回の基本テーマである。

ヘスス・マルベルデ

まずヘスス・マルベルデ (Jesús Malverde) という、日本ではおそらくだれも名前を聞いたことがないだろう、20世紀初頭のメキシコ北部で活動したとされる匪賊を取り上げてみたい。

マルベルデは本名をヘスス・フアレス・マソといい、1870年前後にシナロア州の州都クリアカン近くで生まれ、匪賊として活躍したあと、1909年5月3日に死んだと伝えられている。彼のマルベルデ (Malverde) という異名 (文字通りには「緑色の悪」ないし「悪しき緑」を意味する) がなぜ生まれたのかは判っていない。その死の状況に関しても、いくつかのヴァージョンがあって確かなことはなにもいえない。実はマルベルデについて私たちが具体的に知っていることは、たったこれだけなのである。彼がもともととは鉄道労働者だったとか、いや大工だったとかいう伝承があり、その死も絞首によるとか、銃殺されたとかいわれている。このように曖昧で断片的な物語が語りつがれているが、彼についてはなにひとつ史実だと挙げうるものは存在していないのである。実際、同時代のいかなる記録を探してみても、そこに彼は片鱗たりとも登場していない。

彼とほぼ同時代の北部メキシコを彩っていた匪賊は無数にいた。シナロアでは彼より少しまえにはエラクリオ・ベルナル (1855-1888) が、19世紀末のもっとも高名な匪賊のひとつ

りとしてよく知られている。1886年に独裁者ポルフィリオ・ディアスが大統領年次報告で彼に言及したことで、ベルナルは全国的な名声を獲得してさえいた（Giron 1976: 72）。現在にいたっても彼のなしたことはしっかり歴史的にと記憶されてきている。その活動を裏づける史料も不十分ではあっても存在しており、彼が社会革命家に近い存在だったことが最近では明らかになっている（Robinson 2009b）。また、マルベルデの少しあとで活動した匪賊としては、犯した暴力のすさまじさで民衆のあいだで嫌悪と恐怖をもって語られたファン・イネス・チャベス・ガルシアがいた（Cf. Vanderwood 1992: 178-9）。チャベス・ガルシアはメキシコ革命の動乱を利用して、徹底した悪事を働いた匪賊であったとされる。彼と彼の配下が犯した悪行の数々は各地で深い傷を残しており、例えばサン・ホセ・デ・グラシアという小さな町に彼が刻み込んだ恐怖は、ルイス・ゴンサレスの優れたミクロ史的研究で活写されている⁷⁾（Gonzalez 1973: 129-30）⁸⁾。だが、マルベルデは彼らとはまるで違う。メキシコ匪賊の歴史研究において、彼の名前に出会うことは、これまではまったくなかったといつてよい。その意味で、マルベルデはおそろしくマイナーな匪賊である。それどころか、「金持ちから奪って、貧者に恵んだ」といったあまりにも定型的な匪賊物語の部分を除けば、確実な資料も証言も彼についてはまるでない。そのために、彼の実在そのものが疑われているほどののである。実際にはマルベルデは、おそらくは実在したなんにんかの匪賊（とりわけエラクリオ・ベルナル）の活動を踏まえたうえで作られた架空の存在だったであろう。米墨戦争のあと強制的に米国に組み込まれたカリフォルニアで、不平等さきまる外国人鉱夫税法によって財産を奪われたメキシコ系の人々が、やはり実在の匪賊たちのあれこれの活動から合成して、反白人闘争の先兵に押し上げたホアキン・ムリエタと同様なのである⁹⁾。

しかし、試みにYouTubeでJesús Malverdeを検索してみよう。私たちはたちまち、何百という関連した映像クリップにたどりつける。そのほとんどが空想で築き上げられたマルベルデの生涯の物語であったり、彼に捧げられたコリード（メキシコのフォークソング）、彼への信仰を告白したり、彼の「教会」で熱心に祈りを捧げたりする人々の映像である。そこに映し出されているように、シナロアの州都クリアカン市にはいまでは彼に捧げられた大きな礼拝堂（capilla）が建設されていて、マルベルデ信仰の中心を担っている。マルベルデについては当然ながら写真どころかスケッチ1枚も残っていないのだが、1950年代のメキシコでもっとも有名だった映画俳優ペドロ・インファンテをモデルにしたらしい、眉毛と口ひげの濃い彼の肖像なるものがいつのころから成立していて、絵やフィギュアとして礼拝堂に飾られているだけでなく、クリアカンのいたるところで観光みやげとして売られている。

少しまえまでは、マルベルデの「衆望」はほぼシナロア州内に限定されていた。だが、最近ではメキシコ各地だけでなく米国やコロンビア、さらにはシチリアにおいてさえ、マルベルデ崇拜の急激な増殖が見られ、ジャーナリスティックな関心が寄せられている。ネットワークで検索してみればすぐに判るように、彼にかかわる新聞記事やテレビ・ニュースも増

加の一途をたどっている。カトリック教会は当然のことながら公式には絶対に認めていないが、とりわけシナロア州ではマルベルデはまさしく聖者として広範な人々（特に彼が匪賊に転身するまえにそうだったとされる手工業者を中心にした）に敬愛され崇拝されているのである。彼につけられた異名のひとつは「貧者たちの天使」(el angel de los pobres)であり、クリアカンの礼拝堂には貧しい人々が熱心に足を運んでいる。特に眼につくのは、マルベルデが裏切りによって脚を切られて（あるいは撃たれて）捕まったという伝説があるため、松葉杖や車いすで祈禱に訪れる人々である。彼の死が5月3日とされているので、この日にはクリアカンでは大々的なパレードが組織され、飲食品に加えて、車いすや松葉杖が民衆に配られる。また、彼の遺骸が眠っているとされる場所（ただの中古車置き場なのだが）には、ロウソクや献げ物が山積みされており、そこに巡礼する人々の数も多い。

とはいえ現在、なによりもまず彼を有名にしているのは、シナロアの主要産業（公式の経済統計にはまったく登場しないが、それはマリファナとヘロインの原料であるケシとの生産と流通、それにコロンビア産コカインの中継貿易である）を支えている麻薬密売人たち(narcos)が、彼の熱烈な信者になっているためであろう。彼らは米国との国境をひそかに越えるさいに、捕まらないようにマルベルデの肖像画をお守りとして身につけるし、クリアカンの礼拝堂には、アマド・カリージョ・フエンテスをはじめとする有名な麻薬王たちが奉納したロウソクや現金が、彼らの名前入りで堂々と飾られている。いまでは有名な連中は自宅に礼拝堂を持っていて、ただ寄進をするだけだが、それこそ下っ端のけちな売人にいたるまで、熱心に彼に祈っている姿が目撃できる。マルベルデは彼らにとっては、「麻薬業者の聖人」(el narcosantón)なのである。実際、マルベルデ信仰の近年で拡がり、国境地帯をはじめとして、麻薬業者の活動範囲とほぼ合致している。カトリック教会の聖者リストには、さまざまな職業を庇護する聖人が並んでいて、例えばペルーでは馬泥棒でさえ特定の聖人の守護に預かっているのだが(Valderrama Fernández & Escalante Gutiérrez 1990: 325-6)、私が知るかぎりでは、麻薬業者に特化した守護聖人は彼のほかにはいない。

もっとも、マルベルデに関しては麻薬業者との親近性だけを取り上げるべきではない。前述したように、マルベルデの出身階級だとされる労働者・手工業者だけでなく、貧しい人々、身体的になんらかの「障害」を持って苦しんでいる人々もまた、彼を聖者だと崇め、みずからの苦境や困難からの脱出を願ってその礼拝堂へと足を運んでいるのである。彼に対する信仰は、麻薬との関係をいいたてるジャーナリスティックな扱いよりも、こうした無名の人々こそが支えていることは、強調しておくべきである。それはマルベルデ崇拝についての本格的な研究(Price 2005; Creechan & Herrán García 2005; Rodríguez Prampolini 2010)も主張するところである。マルベルデの礼拝堂を飾っている銀でできた脚や腕や心臓のフィギュアは、その部分での病の治癒を願って奉納されているのであり、メキシコのいたるところで教会の壁を飾っているものと同じである。この礼拝堂が集めている信仰は、少なくともシナロ

アではカトリック教会のそれを奪いつつある勢いだといってよいであろう。

パトリシア・プライスは、彼が匪賊だとされながらも、同時に広く聖人として崇められている事実に着目して、エルネスト・ラク라우にしたがいながら、それは彼のイメージがいかなる具体的内容も持っておらず、したがって、どのような記号内容をも収容できる「からっぽな記号表現」(empty signifier) だからだと述べている。「からっぽ」だからこそ、そこには聖(聖人)と俗(匪賊)という、価値的には対極を構成するはずの2項がともに矛盾することなく存在することが可能だというのである。

とはいえ、こうした性急な記号論の適用には注意を払うべきである。ラク라우は「からっぽな記号表現」について、それが「記号内容なき記号表現」であること、記号表現がなんらかの特定の記号内容から分離されてあるとするなら、後者に関してヘゲモニックな関係性が働いており、そのために記号表現を満たすような内容がつねに変化し、充実を与えてくれないからだと指摘している(Laclau 1996)。確かに匪賊という定義はヘゲモニー闘争の対象になっており、このカテゴリーにだれをどのように含めるかは、つねに権力と反権力という両極のせめぎあいのなかで変動しながら決定されるのであって、固定した記号内容を持つことがない。その意味で匪賊を「からっぽな記号表現」と呼ぶのであれば、なんの問題もない。

しかし、プライスのいうようなかたちでは、マルベルデは決して「からっぽな記号表現」ではない。匪賊であり同時に聖者であるという彼の複合的な属性は、匪賊に関して歴史的な系譜関係のなかで定められた範囲のなかに収まっており、まったくの空虚から生み出されたものではないし、ヘゲモニー対決とは関係していないのである。匪賊でありながらも同時に聖者として讃えられることは、長い歴史過程を持っており、なにもマルベルデとともに突然開始されたわけではない。

そのことは、アルゼンチンでマルベルデとよく似た過程をへて聖人として崇拝されている gaucho・ヒルと比較すれば、一目瞭然だといえる。

このヒル(本名はアントニオ・マメルト・ヒル・ヌニェスとされる)はアルゼンチン北東部コリエンテス州パイウブレ地方に生まれ、19世紀後半に活動したと伝えられる gaucho である(gauchoはその生活基盤だった広大なパンパが無主地から私有地へと変換される過程で、所有者がそれまではいなかった野生の馬や牛を「不法」に取得する存在として、支配層からは匪賊と同一視されるようになる)。彼ははじめある農園で働いていたが、パラグアイとの戦争(1865-70年)にさいして強制徴兵された。その後、軍隊を脱走して匪賊生活に入り、盗品(主に牛)を貧者たちに配分した。聖バルタサールの祝日(1月8日)に捕らえられ、裁判もなしにただちに殺害された。農園主の娘との悲恋物語も残されている。崇拝は1990年代に全国化する。マルベルデと同じく、教会が認めていない聖人として、熱烈な民間信仰の対象になっている(San Juan Suárez 2010)。アントニオ・ヒル以外にも、アルゼンチンではファン・パウティスタ・バイロレト(1894-1941)のような実在した匪賊たちが、

やはり「民間聖人」として崇拝されている (Chumbita 1999: 86-8)。

マルベルデもヒルについても、たとえおのおのが崇拝される社会的・政治的環境が異なっているとしても、似たようなパターンの物語が紡ぎ出されている。このパターンを考えなければならない。

聖者と匪賊

聖俗という対立した価値を兼備する両義的な存在は、宗教学や社会学・人類学でこれまでにさまざまに主題化されてきているが、ここでそうした動向に詳しく触れる必要はあるまい。本稿ではあくまでも匪賊とのかかわりのなかで、そのことを考えることにしたい。

匪賊と聖者が深くかかわっている早い例のひとつは、なによりもまずナザレのイエスである。彼が匪賊の歴史に連なる存在だったということは、少々驚きをもって受容されるかもしれない。だが、イエス・キリストは深く匪賊とかわっている。彼の逮捕と処刑にさいして、彼が当時のローマおよびユダヤの権力当局によってまさしく「匪賊」(leistes) として扱われたことは、聖書そのものに明記されているのである。それによると、彼は逮捕されるときに相手に対して「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか」(Hōs epi lēstēn exēlthate meta makhairōn kai xulōn sullabein me) と述べており (マタイによる福音書 26.55——さらにはマルコによる福音書 14.48, ルカによる福音書 22.52 をも参照), みずから「強盗=匪賊」(leistes) のように扱われていることに抗議していた。逆にいえば、権力者側は彼をメシアとしてではなく、「剣や棒を持って」捕まえるべき「強盗」として把握していたわけである (聖書からの引用は新共同訳にしたがう)。

また、彼が十字架刑に処せられたことはよく知られている。そもそも十字架上での処刑はローマ時代には、ブレント・ショーによれば「匪賊に対する処罰として、長い歴史を持っていた」(Shaw 1984: 20) とのことである¹⁰⁾。つまり、彼は匪賊のように扱われ、そして匪賊として処刑されたのである。さらに、最後の地ゴルゴタ (カルヴァリオ) の丘において「折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられている」(Tote staurountai sun autō duo lēstai, eis ek dexiōn kai eis ek euōnumōn) といわれているように (マタイによる福音書 27.38——マルコによる福音書 15.27, ルカによる福音書 23.33 をも参照), 彼は「ふたりの強盗=匪賊」(duo lēstai) に挟まれて処刑されている。これはイエスがふたりと記号論的にいえば完全な隣接性の関係にあることを示しているのは明らかであろう。左右を「強盗=匪賊」によって囲まれていたことは、イエスもその同類だったといっているに等しい。加えて、これはルカによる福音書に記載されていることだが、イエスとともに十字架にかけられていた犯罪人のひとりが彼をののしると、もうひとりが「お前は神をも恐れないのか。同じ刑罰を受けているのに」(23.40) とたしなめている。つまり、

イエスはまさしく強盗＝犯罪人と「同じ刑罰」(en tō autō krimati)に処せられているわけである。ここで描かれているイエスはもっとも高貴な存在であると同時に、強盗＝匪賊なのである。

ここではとりあえず現行の新共同訳にしたがって「強盗」とした *leistes* (複数形は *leistai*) は、ラテン語の *latro* に対応しているが、それはローマの支配下にあった当時のユダヤでは単なる盗賊を意味するだけでなく、叛逆者、さらには革命家をも指していたことばであった。この点についてグリューネヴァルトは、こう述べている。

「ナザレのイエスはユダヤ人およびローマ人の両当局によって一様に *leistes* として扱われ、ふたりの *leistai* のあいだで十字架にかけられた。彼にしたがう人々にとっては、彼は王だったが、彼の敵対者たちにとって、彼は通常の犯罪者であった。*leistes* と等置され、そのもっとも広い意味では篡奪者とされた彼の事例が示しているのは、ユダヤにおける *leistai* に関しては、私たちは通常の犯罪者としての匪賊を扱っているのではないということである。彼らは叛徒であり革命家であり、政治的目的の戦いを追求するために、必要ならば強盗によってでも資金を獲得して、法の内部で行動するという保護を放棄したすべての人々である。」(Grünwald 2004: 91-2)。

このためにイエスを社会革命のリーダーだとする解釈も不可能ではないが、少なくとも新約の記述にしたがうなら、イエスは立派に「強盗」の仲間でもあることになる。聖なる存在であったイエス・キリストが匪賊・盗賊とのあいだに持っていたこのような隣接性は、後代においてなんにんもの匪賊のイメージに再現されることになる。多くの匪賊は聖的なものと俗的なものとの双方を兼備するのである。それについては、いくつもの事例を挙げることができる。

まず、レコンキスタ時代のスペイン匪賊であったベドロ・カルボネロを取り上げよう。彼の活動についてはなにがしかの史実がもとになっていたらしいが、その生涯を彩っている逸話のほとんどは民間伝説やロペ・デ・ベガの筆先から生まれている。それらによると、彼はもともと匪賊活動に従事していたのだが、ある時信仰に目覚め、キリストの戦士へと変身して戦って殉教したという。彼の部下は使徒の数と同じ12人とされ、その12使徒と同じ名前を持っていたともいわれる。カルボネロ (Carbonero) とは炭焼きのことである。炭を焼く仕事についていた人々はヨーロッパの歴史では社会的に排除された存在であって、とりわけ仕事からんで森とのあいだに持っていた密接な関係のおかげで、野生の空間に住まう人々だと見なされていた。彼らはさらに、狼 (前回で触れた *wargus* とのかかわりを想起されたい) と同一視されることもあった (Delpech 1991: 109)。このような野生の存在は人間の秩序に属さないがゆえに、超自然的な能力や特質を持つとされており、ヨーロッパ中世以来の「野生人」(Wild Man, *homo sylvestre*) の系譜と連なっていた。彼らは野生の世界へと、つまり人間界から「下へ」と放逐されるのだが、同時にまた、その排除図式は反転して彼らの

「上へ」の上昇をも可能にする。もっとも卑俗な存在がもっとも高貴な存在と互換可能なことは、神話や伝説ではごく当たり前の話である。

ペドロ・カルボネロがまったくの虚構の産物だったとしても、匪賊が聖人と親しいとされた例は、歴史的にいくつも挙げることが可能である。例えば、18世紀中葉に主に南部フランスで活動した匪賊（主な仕事は密輸）だったルイ・マンドラン（1725-55）は、死後に流布されたイメージのなかでは「犯罪者と英雄という二重の相貌」（double figure du criminel et du héros）を呈していた（Lüsebrink 1979: 357）。このような二重性はマンドランだけに見られたものではない。マンドランたち大犯罪者は、死刑台に昇って罪を告白する場合も、苛烈な拷問に屈せずに死ぬ場合にも、ミシェル・フーコーのことは借りれば、「人々は死刑囚たちを死後にある種の聖者になったと見て、その記憶をたたえ、墓を尊重した」（Foucault 1975: 80）のである。

18世紀アンダルシアでもっとも高名な匪賊だったディエゴ・コリエンテスを取り上げてみよう。彼は追求を逃れてポルトガルに潜んでいたところを裏切りによって逮捕され、1781年3月25日にセビーリャへと連行され、そこで24歳という若さで同月30日に処刑されている（Bernaldo de Quiros 1959: 59; Pike 1988: 246）。計算すれば判ることだが、同年の3月25日は日曜日、30日は金曜日であった。つまり、彼の死はキリストの逮捕と処刑という受難の過程を新たになぞったものとして、人々に記憶されているのである¹¹⁾。

18世紀のムーズ川下流地方を荒らしまわった「雄山羊騎手」（Bokkeryders）という異名で知られる匪賊たちは、逆にカトリック教会とは正反対の秘密の入社儀礼や悪魔との結託によって名高いが（Blok 2001: chap. 2）、それによってキリスト教にしっかりと縛りつけられているといってよい。

また、19世紀メキシコで最大の匪賊として知られるマヌエル・ロサーダについては、彼にずっと忠実で、その武装勢力の中核をなしていた先住民ウイチョル人のあいだでは、その死後に関して特別な伝承が残されている。それによればロサーダはイエス・キリスト、さらにはウイチョル人の文化英雄であるカウイマリ（kauymáli）だと見なされていた。伝承が述べているところでは、ロサーダは本拠地であるナヤリから首都メキシコ市に「第一頭領」として到着したが、ユダであるラモン・コロナ将軍によって大統領官邸のユダヤ人たちに引き渡され、彼らの手で官邸において処刑された。しかし、その心臓は栄光のうちに彼の身体を離れたとされる（Montoya Briones 1972: 590）。

ほとんどが伝説から組み立てられているペドロ・カルボネロの生涯は別としても、上記のコリエンテスやロサーダは、しっかりと実在した匪賊であった。彼らが死後にイエス・キリストとほとんど同一視されたことは、決して迷信深い民衆の妄想に帰することはできない。民衆の想像力は無から生まれるものではなく、つねに特定の歴史的・社会的な枠組みのなかで働く。ここではキリスト教が受難や殉教というモデルを提供し、そのモデルにしたがって

匪賊の最後が語られている。かくして、彼らは民衆によっていわば列聖化されたのであって、かくして聖マルベルデや聖ケリーが生まれたし、コロンビアでは殺された匪賊たちの墓に、年老いた女たちが火をともしたロウソクを手にして巡礼を繰り返すのである (Ortiz Sarmiento 1990: 198)。

シンボリックな両義性

こうしたイエス・キリストとの同一視といった、キリスト教的な枠組みが正面からはっきりと明示されていない場合でも、匪賊にはさまざまなかたちで聖性が付与されている。

例えば、もっとも一般的なものひとつとして、彼らの多くは不死性を身にままとっている。しばしば彼らは死をまぬがれる。刑務所で病死したハンガリーのロージャ・シャーンドルや、アンジコス農場で待ち伏せに遭って殺され、その頭部が各地で見世物として展示されたブラジルのランピオン、裏切りで殺されたあと、屍体写真まで公開されているジェス・ジェイムズ（普及している「ジェシー」という名前は正確ではないらしい）であってさえ、死後に彼らの姿を見たという伝説は、枚挙にいとまがない。ジェス・ジェイムズもビリー・ザ・キッドも、さらには 1934 年にシカゴの映画館を出たところで射殺され、何千という人々がその死骸を眼にしているギャングのジョン・ディリンジャーでさえ、まるで殺されてなどいないらしく、その証拠に彼らをのちになって目撃したという証言には事欠かないのである。ディリンジャーのあとを継いで「公共の敵 No.1」に指名されたのはチャールズ・アーサー・フロイド（「ブリティー・ボーイ・フロイド」）だが、彼はやはり 1934 年に追い詰められて FBI の手で射殺された。しかし、殺されたのは実は別人だったと噂されている (Kooistra 1989: 64-5, 98, 132, 137)。

オーストラリアのネッド・ケリーのように、逮捕されて裁判にかけられたあげくに公開で絞首刑となった匪賊の場合、その死後の生存を主張することはおよそ困難かもしれない。彼の死は確定されたものなのである。だがその場合であっても、彼に替わって弟のダン（彼はネッドが逮捕されたグレンローワンでの銃撃戦で射殺されたが、屍体の損傷がひどく、はっきりとは識別されていなかった）が生き残ったという伝説が流布していた。グレアム・シールは「英雄の生存を信じたいという大衆の欲求」が、確実な死を迎えたネッドから、生死不明なダン・ケリーへと「転移された」と解説している (Seal 1996: 167)。

イエス・キリストは過越祭の朝に復活したとされるが、匪賊も死という人間の生の絶対的な障壁をやすやすと乗り越え、死後にも生きていることが信じられただけでない。彼らは生前にすでに不死性を獲得していた。例えば、極度に信心深かったランピオンは、みずからの身体が弾丸やナイフに貫かれることのない「閉ざされた肉体」(corpo fechado) を持っているとして信じており、それを保つための特別な祈禱文を身につけていた。この祈禱文は実際に彼

の屍体から発見されている (Chandler 1978: 206-8)。また、19 世紀末のモザンビークージンバブエ地帯で活動し、ロビン・フッド的匪賊だといわれたマボンデラは魔法のしっぽ (nyumbe) を手に入れたが、それは弾丸を水に変える力を持っていたとされる (Isaacman 1977: 15-6)。つまり、彼は銃弾では殺されないのである。ホブスボームは「匪賊は不可視かつ不死身ではなかったか」と問い、こうした信仰が広がる原因として、匪賊が民衆のあいだで満喫できる安全性や、「民衆のチャンピオンは打ち負かされえない」という民衆側の願望を挙げている (Hobsbaum 2000: 56-7)。祖霊の加護や特定の護符を所持することによって銃弾による殺害が無効になるという信仰は、中国では太平天国や義和団の動乱にさいして、インドではセポイ (シパーヒ) の叛乱、米国では 19 世紀末の「ゴースト・ダンス」に導かれた平原インディアン蜂起にさいして、さらにはいくつもの多少とも千年王国的な色彩を持った大衆運動でしばしば観察されるのであるが、個々の傑出した匪賊にも同様な力が与えられていた。匪賊は前者をフロイト風にいうなら「凝縮」していたのである。

それゆえに、ありえないはずの彼らの死はなにか特別な原因を持たされる。

なによりもまず、親しいものたちの裏切りがある。ロビン・フッドは甥の裏切りで殺されたといわれる。ディエゴ・コリエンテスはポルトガルに潜んでいたところを仲間の裏切りによって逮捕され処刑された。19 世紀中葉にメキシコ中部で大匪賊団を率いていたファン・チャベスは、1869 年にふたりの部下の裏切りで殺害された¹²⁾。マルベルデは代父 (compadre) によって両脚を切られて官憲に引き渡されたという説がある。ビリー・ザ・キッドは 1881 年に親友だったパット・ギャレット (彼にはユダの名前がずっとついて回った) に射殺されたし、ジェス・ジェイムズは 1882 年に友人のボブ・フォードに背後から頭を撃ち抜かれた。

だが、あの汚いけちな卑怯者がミスタ・ハワード [ジェスの変名のひとつ] を撃ち殺しジェス・ジェイムズを墓場に横たえたのだ

と「ジェス・ジェイムズのバラード」は唄っている (Seal 1996: 99)。

「シナロアのルイジ・ヴァンパ」とまで呼ばれたエラクリオ・ベルナルは、1888 年初頭に賞金に眼がくらんだふたりの部下に殺された (ルイジ・ヴァンパは周知のように大デュマの小説『モンテ・クリスト伯爵』に登場するいなせなイタリア匪賊であって、ベルナルは生前にすでにこうした華麗な虚構と一体化させられていたのである)。19 世紀のゴールド・コースト (現ギアナ共和国) で有名だった匪賊クワメ・アベは「彼はたちまちのうちに出現し、危険が迫ると自由に消滅した」といわれていたが、一説によると入浴中に不実な愛人から熱湯を頭に浴びせられて殺された (Kea 1986: 125)。サルヴァトーレ・ジュリアーノのいまだに謎の多い死が、直接にはマフィア側に寝返った友人のガスパーレ・ピシオッタの手に

なったことは確かなようである。あの偉大なランピオンでさえ、アンジコス農場での銃撃戦のなかで死んだのではなく（彼がたかだか敵の銃弾で死ぬわけがないのだ）、友人のジョアン・ベゼラによって毒殺されたともいわれているし、もっとビザールなヴァージョンでは、ランピオンの愛人マリア・ボニータまでこの毒殺の手助けをしたことになっている（マリア・ボニータはランピオンとともに虐殺されたのだが）。アンジコスでの戦闘はまったくの急襲であって、ごく短時間で終わったため、「ランピオンが戦うことなく死んだとか、ブラジル全体、とりわけ奥地（sertão）で彼を特徴づけていた戦士の暴力を示すことなく死んだなどと信じたり受け入れたりするのは困難だった」（Grunspan-Jasmin 2001: 137）のである。

このような匪賊の裏切りやぺてんによる死というテーマは、古くからしっかりと打ち立てられていた。古代ローマ帝国を彩った数々の匪賊のなかでもとりわけて名高かった、紀元前2世紀のイベリア半島で活動したウィリアトゥス、それに紀元3世紀初頭に首都ローマ近くを荒しまわったブッラ・フェリクスは、ともに戦闘では打ち負かすことができず、ただ裏切りによってのみ殺害できた。彼らはローマが徳として掲げたものの体現者として、帝国の墮落や腐敗の反対物として表象されていたのである。それゆえに不敗の彼らはただ卑劣な行為によってしか打倒できないという、「ローマの *latrones* を特徴づける既定の主題（*topoi*）のひとつ」となっていた（Grünwald 1999: 45-7, 117-8）。

金に眼がくらんで敵に寝返るといった、信頼の絆で結ばれていたはずの世界に友人や部下が背いたこと、つまり、本来なら友愛に満ちた麗しき関係であるべきものを、悪しき金銭への欲望によって破壊することであって、だからこそ本来は不死であるはずの存在が失われるのである。実際の匪賊活動のなかでは、裏切りや寝返りなどごくありふれたものであった。匪賊と討伐隊員とのあいだでの互換性は、世界のいたるところで広く知られている。追う側と追われる側とを隔てる境界線はひどく細いものであったし、穴だらけであった。南北戦争後のミズーリやオクラホマでは、自警団といい匪賊といっても、それは「利害が別の市民たちとは異なっていた側への侮蔑的な名称でしか」なかった（White 1981: 400）。メキシコでは独裁者ボルフィリオ・ディアスの自慢の胤だった「農村警備隊」（*los Rurales*）には、数多くのもと匪賊が組み入れられていたし、そこから脱走した連中はあっさりと元の匪賊生活に戻っていった（Vanderwood 1992）。19世紀アンダルシアにおける匪賊の華といわれ、メリメの『カルメン』（それをもとにしたビゼーのオペラも忘れるわけにはいかない）を通じて不朽の文学的名声を獲得しているホセ・マリア・イノホサ（「エル・テンプラニリョ」）でさえ、1832年に投降して国王から恩赦を与えられたあとでは、セビーリャで公安部隊の部隊長となって、今度は匪賊討伐にいそしんだのである（Bernaldo de Quiros 1959: 135）。もちろん、フランスには大犯罪者から治安警察官にやすやすと鞍替えして、名高い回想録¹³⁾を出したフランソワ・ヴィドックがいて、法と違法とが実のところ紙一重でしか隔てられていないことを明示している。匪賊と反匪賊とは、そこでは同じ根から生まれている。

だが、裏切りによって殺された匪賊には、特別なアウラが与えられる。というのも、卑劣で貪欲な連中の犠牲になったのであれば、その犠牲者は必然的に高貴で清廉なイメージを身にまとうからにほかならない。こうした卑劣きわまる行為の先鞭をつけたのは、もちろんあのイスカリオテのユダである。周知のように彼は「銀貨三十枚」と引き替えに、「接吻で人の子を裏切る」ことを選んだのであった。裏切り者とその犠牲者との対比関係は、ほとんどつねにユダとイエスとの関係に重ねられ、それによって範列的な生産性を手に入れるのであり、裏切りで死を迎えた匪賊はイエスと同じく聖別されることになる。ここでもイエスの物語と匪賊との接点が見られる。

こうした不死性は、裏切りだけでなく、不摂生によっても打ち碎かれる。ランピオンがアンジコス農場で待ち伏せにあって死んだという事実を認めた人々のなかでは、殺されたのは守護に必要とされた性的節制を彼が守らなかったからだと主張している人々がいる。つまり、必要ななかを故意か不注意で欠くというミスを犯さなければ、彼は生きつづけたのである。マポンデラは逮捕され、老年だったために投獄7年を宣告されたが、牢獄に入ることを拒否して、ハンガー・ストライキによって死亡した。彼にあって、ニュンベの力は最後まで働いていたのであろうか。

死の超越という究極の超自然性が付与されなくても、きわめて多くの匪賊が、なにか人間界を越えた力によって守られていた。ランピオンは右目が事故で見えなくなっていたが、それを補償するように、左目で危険や裏切りを予知できた。(Grunspan-Jasmin 2001: 179-80)。19世紀後半に教会の権威を嘲笑い、上流階級の偽善的生活を攪乱してメキシコを騒がせたチュチョ・エル・ロト(本名ヘスス・アリアガ、?-1885年)は、3度もやすやすと脱獄して、そのため絶大な大衆の人気をえただけでなく、新聞報道では40歳ほどだとも50歳ほどだともいわれ、背は低かったり高かったり、肌の色も褐色だったり白だったりする(Robinson 2009a: 10-11)。つまり、彼は固定した外的特徴を持っておらず、自在に変化する捉えどころのない存在であった。それだけではなく彼は、男と女という社会的・文化的区分の硬直した維持と、そこにおける圧倒的な男優位主義が支配していたラテンアメリカではなかなか考えにくいことなのだが、変性さえ得意にしていたらしく、女装した彼のポートレートが残されている(彼の部下のひとりにも「メスザル」[La Changa]という異名を持った男がいたことにも留意されたい)¹⁴⁾。アフリカでは多くの匪賊が人間界を越える「呪術的・宗教的」な力に守られていた(Austen 1986: 102)。もっとも、オースティンはこのような特徴がアフリカに固有なものだとして、ホブスボーム的な匪賊把握(「西洋モデル」)に対する別個のモデルを提唱しているが、匪賊がいたところで「呪術的・宗教的」世界と接点を持っていたことからして、それは疑わしい。例えば、アンジコスでランピオンとともに殺された11名のカンガセイロたちの断首された頭が並べられた写真があるが(イタリアを含めて、射殺・銃殺された匪賊の写真は大量に残されているが、それは彼らが本当に殺されたのだと

民衆に示し、生存伝説を断ち切るための近代的手段であった)、そこには彼らを守ってくれたはずのいくつもの護符が銃や特徴的な帽子と一緒に展示されている。アンジェロ・ドゥカは魔法の指輪で銃弾から守られていたし、中国の匪賊たちはいくつものタブーや迷信に囲まれていた (Billingsley 1988: 145-8)。なにもアフリカだけが匪賊と呪術的なものとのかわりを独占しているわけではないのである。

こうした匪賊たちの不死性神話や、常人にはとうてい不可能な諸能力 (それはロビン・フッドの驚くべき弓術や奸計からはじまって、度重なる巧みな脱獄や危機からの脱出にさいして発揮される並外れた洞察力と行動力、それに敵対者を自由に翻弄する機知などが含まれる) の具有は、彼らを通常の人間が服している諸制約を物理的にも精神的にも超出する、なにか異様な存在にしている。もちろん、このような彼らの突出した諸能力は、決して超自然的なものの介入によらなくても説明は可能である。脱獄ひとつを取り上げてみても、その原因が主にいたるところに見られた司法・警察組織の弛緩や腐敗のおかげだったことは、いうまでもないであろう。だが、そのような説明を民衆は一方では受け入れながら、にもかかわらず、そこに働いてしかるべき、自分たちにはとりあえずないのは当然だが、しかし、どこかに存在しているに違いない超越的なものへと希求を匪賊に重ねているのである。銀行強盗のジョン・ディリンジャーを有名にしたのは、「脱出不可能」といわれていたインディアナ州クラウン・ポイント刑務所から木製の拳銃を使ってやすやすと脱獄できたことであった。このような大胆で機知に富んだ犯罪者であったために、彼が1934年7月22日にシカゴでFBIに射殺されたとき、流された血にハンカチーフどころかスカートのへりまで使ってひたして、人々は記念に持ち帰ったのである (Kooistra 1989: 129-31)。

匪賊は一方では私たちと同じ現実の世界、私たちと同じさまざまな制約に縛られている世界の住人である。だが、彼らは同時に、私たちには許されていない自由、課税や地代や強制徴兵や日々の重労働や不当な命令・処罰などを超出したところにある自由を体現してもいる。それによって、彼らは人間界に属しながら、なおかつそこから逃れ出ることが可能であった。神々であれば、そのようなことをやすやすと実行できるであろう。したがって、そうありたいという願望は、ただの夢想でしかない。しかし、私たちと少なくとも同じ人間でありながら、人間としての限界を超え出る存在には、不可能ではないという希望を託せるのである。

ここでノースロップ・フライの分類法を参照してみるのが適切であろう。フライが文学批評の歴史において持っている理論的地位はここでは問題ではない。彼の原型についての理解は、私には納得できないのだが、彼が文学作品における主人公を、その行動能力にしたがって、つぎのような5つの類型に分類していることは¹⁵⁾、私たちの議論に役に立つ。

第1は、主人公が他の人間や人間環境よりも質的に優れている場合であって、そこでは自然法則はあっさりと破られる。そのような主人公は神であり、その世界は神話に属する。

第2は、主人公が他の人間や人間環境に対して、程度の差によって、つまり量的に優って

いる場合である。主人公はなにか特別な力を与えられていて、人間でありながらも、自然法則が部分的に停止している世界の住人である。これは私たちにとっては、もっとも重要な類型であって、フライはそこでの主人公を「ロマンス英雄」と呼んでいる。

第3にくるのは、自然環境に優っていないが、他の人間よりも程度において卓越している存在であって、「大部分の叙事詩や悲劇の主人公」がそれに当たる。人間としては私たちとまったく変わらないが、その優れた能力や知性や卓越した行動によって、私たちの平均値をはるかに超えている人々なのである。

そのほかに、第4として他の人間にも環境にも優っていない、要するに私たちと同じ主人公がいる。さらに第5として、知性や能力で私たちより劣っている存在が挙げられる。

この5つのタイプのうち、ここで特に取り上げられるべきなのは、当然ながら第2と第3のそれである。匪賊は民衆的想像力のなかでは、民衆の仲間のひとりでありながら、彼らを突出する能力の持ち主である。彼はほとんどの人々が圧倒的な権力（国家権力であれ地方ボスや農園主の支配であれ）の現前に対して、どのような理由からであっても¹⁶⁾、身を屈することを拒否することで、まずはおのれを突出させる。匪賊が出現するのは多くは農村社会においてであるが、その慣習的に織りなされた構造や動態から決定的に剝離するためには、ただの並外れた勇気や才能だけでは充分ではない。天与のなにかに恵まれていなければならない。特別な贈与が彼にはあらかじめ与えられているのである。このことによって、彼らは第3類型から第2類型へと移行する。この移行はひとつの飛躍である。第3類型にある主人公はいわゆる *primus inter pares* なのであって、同等な人々のなかでの第1人者であるにすぎない。それに対して、第2類型においては彼はもはや人間の能力を越えた、いってみれば超自然的な領域に片足を踏み込んでいるのである。したがって、人間には許されていないさまざまな力を、彼らは自由に駆使できる。

もちろん、それは神話・伝説の世界のことであって、現実にはありえない力である。だが、これに関しては、少なくともつぎことが指摘されてしかるべきであろう。

そのような象徴的な移行が、匪賊たちを歴史的に伝承されてきた定型的な想像力としっかりと結びつけるのに役立ったことである。さきに触れておいたように、エラクリオ・ベルナルは「ルイジ・ヴァンパ」や「ディエゴ・コリエンテス」と綽名されていたし、ロビン・フッドにいたっては世界中いたるところで彼の名前で呼ばれる匪賊たちがいた。あのアル・カポネでさえロビン・フッドにたとえられるという栄誉に浴しているのである。チトクワは「ローデシアのネッド・ケリー」だったし (Ranger 1986: 377), ジェス・ジェイムズも米国とはおよそ異なった場所で「名誉ある匪賊」の名前として使われてきた。ジェイムズやケリーたち自身が、こうした伝統の力を借りて、ロビン・フッドやロブ・ロイにおのれを擬していたことはいうまでもないであろう。

特に19世紀後半以降になると、大衆的ジャーナリズムがかなりの発展をしており、その

ことに自覚的な匪賊たちはみずから単なる強盗などではなく、なんらかの不正をこうむった犠牲者であり、自分たちはそれを正すために戦っているという声明を新聞等に発表している。ジェイムズの場合には、彼が書いたとされるいくつもの手紙が、果たして本当に彼の手になったものか、あるいは、彼への共感を隠さなかった民主党の旧南部連合派新聞の捏造なのかは明らかではないのだが、ネッド・ケリーのいわゆる「ジェリルデリー書簡」(1879年に負傷して逮捕される直前に口述されており、いまではオーストラリアの「国民的遺産」の一部になっている)が真正なものであることは疑いの余地がない¹⁷⁾。また、後述するアルゼンチンの義賊として知られるマテ・コシードが1940年3月に雑誌『アオーラ』に寄稿した手紙も同様である。アーサー・ペン監督の映画『俺たちに明日はない』(Bonnie and Clyde, 1967)であまりにも有名になったボニー・パーカーは、自分たちの来るべき悲劇的な最後を歌った下手な詩を新聞に送りつけたし、誘拐した警察官を釈放したさいに、自分がマス・メディアで報じられているように葉巻を吸ったりはしない女なのだと伝えるように要求さえしている(Kooistra 1989: 132)。

このような自己宣伝を通じて、彼らは社会的匪賊のイメージを身にまとい、しばしばそのようにもふるまうことで、長くつづいてきた系譜を保存する役割を果たしている。匪賊には匪賊なりの「伝統」があって、生存のために要求される民衆の支持を確保するためには、義賊であるようにふるまうことを強制されていたのである。そのためにマス・メディアが使われたのである。

社会的存在としての両義性

もっとも、このような聖俗を兼ねあわせた匪賊の姿は、決して単なる想像世界に限定されてはいない。実のところ、匪賊という存在そのものが、現実にも両義的であることを忘れるわけにはいかない。彼らはふたつの対立的な世界をともに生きることを要求されているのである。

匪賊は国家権力と民衆という両極のなかでしか存在しているわけではない。というより、こうした両極が完成し、前者が絶対的な力を発揮できるような社会では、集団としての匪賊は存続の可能性を持たないのである。すでに述べたように、法の外部にあって、しかも一定の集団であるという条件を必要とするのであれば、中央権力の専一的で絶対的な支配の不在こそが、彼らの存立条件である。それはしばしば、辺境に出現する。というのも、国家権力の中央集中は、当然ながらそれと対立的に周辺部を生み出すからである。国家が地域支配を中央において集権的に組織する存在であるかぎり、中心と周辺という区別は必然的にそれに伴わざるをえない。問題は周辺部にまで国家権力が直接に十分に統治できるかどうかである。中世ヨーロッパでは、王権は在地権力の協力があって、はじめて地域支配を可能にしたし、

19世紀エチオピアでも同様であった。メキシコもまた、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ボルフィリオ・ディアスの鉄の支配が確立したさいにも、それは各地に盤踞する個別的な政治勢力の懐柔を必要としていた。独立のあとのブラジルでは、「大佐」(Coronel)という名称を持った地方権力者(ほとんどが大土地所有者でもあった)が、とりわけ北東部の「奥地」(Sertão)で、勝手気ままな支配をつづけていた。アジアやアフリカ各地では、フランスのように直接支配を試みはしても、やはり植民地統治は中間に位置する地方的な権力を利用せざるをえなかったのである。

民衆と国家権力(植民地当局を含む)とのあいだに介在して、両者のあいだの媒介になっている勢力を、政治学や社会学にしたがってとりあえずパトロンと呼んでおこう。パトロンが保護者として登場するとき、彼らの庇護を受けるのがクライアントである。このパトロンとクライアントとの関係が、匪賊の現実的両義性を解く鍵のひとつになる。

パトロン-クライアント関係は、カール・ポラニーの用語を借りるなら再分配関係にはかならない。ポラニーは対等な位置にある共同体や個人のあいだでの平等的な財やサービスのやりとりを互酬性(reciprocity)と呼び、再分配(redistribution)は特定の中心的存在(地主や地方権力といった)とのあいだで結ばれる互酬性だと規定している。もちろん、再分配でははっきりとした上下関係が設定されており、クライアントは一定の耕地や牧草地の用益権を保証され、また、災害時などにミニマムな保証を受ける代償として、パトロンが要求するさまざまなサービス(無償の家事労働から農地耕作や家畜の保護までにいたる)を強制されていた。しかし、不平等ではあっても、そこに流れているのは互酬性の痕跡であり、パトロンもなにがしかの義務や責任を負うのである。

重要なのは、このパトロンが弱体な中央権力のもとで、在地の特別な権力者として匪賊とのあいだに持つ関係である。匪賊活動をめぐるこれまでの論争のなかで、それは基軸的な論点のひとつを形成している。

ホブスボウムへの批判の原型を作ったといえるアントン・ブロックは、まさにこの点を重視し、匪賊は結局のところ、パトロンとの密接で親密な関係がなくては存続できないと主張している(Blok 1972; 1974)。リチャード・スラッタも同様に、「農民大衆ではなく、地方の地主エリートたちこそが、主な匪賊たちとはるかに近い絆を結んでいた。ラテンアメリカの主要な匪賊は、エリートの階級敵であったどころか、地方の寡頭支配層のために、また、彼らとともに、さらには政府の役人とともに活動したのである」(Slatta 1987b: 192)とまでいいきっている。ランピオン以前にブラジルでもっとも有名だった匪賊(カンガセイロ)だったアントニオ・シルヴィーノ(1875-1944)に関して、リンダ・レウインは「シルヴィーノの驚くほど長期にわたるカンガセイロとしての生存は、彼のもっとも信頼できた保護が、農村社会の貧民よりも、有力者たちとの結びつきから一貫して立ち現われていたという事実によって説明される。こうした結びつきは、彼を民衆の匪賊としてよりも、地主の匪賊とし

て規定していたのである」(Lewin 1987: 77) と述べる。これらの定型化されたホブスボウム批判は、現在でも「無批判」に繰り返されている (Cf. Ferreras 2003)。

確かに、近世初頭のカタルーニャ、19世紀のアンダルシアやシチリアやエチオピア、19世紀後半から20世紀はじめのブラジル北東部など、在地の権力者や地主（ふたつは多く重なっている）の手先になって農民に敵対する匪賊たちは数多くいた。

ティモシー・ファーニハウは20世紀前半のエチオピア北部（アビシニア）での匪賊活動（sheftenat）を扱った重厚な論文（Ferryhough 1986）において、匪賊（shefta）がまったく、地方権力者の地位上昇の道具にほかならず、このような活動がごく一部の農民に脱階級の可能性を提供するかぎりでは、それは農民の水平的な連帯を破壊し、パトロンとの垂直的統合を結果したにすぎないと、ホブスボウムを厳しく攻撃している。もっとも、ファーニハウはその後、こうした批判を少なくとも部分的に撤回したらしく、匪賊活動に参加した農民の数は多く、彼らはかならずしも地主や郷紳にまったく服従していたわけではないし、農村共同体との絆は保たれていたこと、とりわけ1941年の農民叛乱に匪賊が合流したあと、エチオピアで帝政が倒されるまで、匪賊は農民の連帯を妨害するようなかたちでは必ずしも行動しなかったし、権力側に立った匪賊でさえ、農民の怒りに火をつけるという意味で逆説的にはあっても「弱く貧しい人々を政治化する」ことに役立った可能性があるとも述べるにいたっている¹⁸⁾。

なお、ファーニハウは1986年の論文において、植民地化されたエリトリアや、イタリア支配下のエチオピアにおいて、民族解放にかかわる匪賊活動があったことを認め、そこではホブスボウムの社会的匪賊の姿が管見可能だともしている (Ibid: 166)。

いずれにせよ、匪賊全体を把握するなら、その多くが情報・武器・食料などの確保のために、また、逮捕の危険を逃れるために、なんらかのパトロンを必要としたことは事実であろう。そのような可能性が不在だった場合、例えば19世紀末サン・パウロ州西部でのイタリア移民たちからなる匪賊活動は、エリート層の反移民感情のために、早期に終焉している (Monsuma, et al. 2002)。だが同時に、彼らは完全な流浪民ではなく、いざというときに逃げ込むことができる場所、官憲の追求からとりあえずは自由な場所を保たなければならなかった。ロビンたちが暮らしたというシャーウッドの森から、ブッチ・キャンディーたちワイルド・パンチが本拠としたワイオミングはジョンソン郡の森 (Kooistra 1989: 100) にいたるまで、森は彼らの適切な隠れ家だったが、しかし、その周辺に住む農民との関係がなければ、生存をつづけるのは不可能に近い。

つまり、匪賊は一方ではパトロンと提携しながらも、他方では農民とのかかわりのなかで生きなければならなかった。この不安定な位置からして、彼らはパトロンのもとへの統合か、農民との（かなり稀ではあるが）結合のあいだで揺れ動くことになる。彼らはその意味で両義的な世界の住人であって、いずれにも属するとともに、いずれにも属さないという特性の持

ち主なのである。彼らは農村共同体にとって「外部」にある人々である。だが、共同体の「外部」であるとはあくまでも「内部」との関係のなかで規定されるものであり、それゆえに「内部」から完全に離脱することはできないし、パトロンとのかかわりも同じなのである。もっとも、ボリビア南部のふたつの村の社会構造を比較したエリック・ランガーは、農村共同体がしっかりと存続していた村では、地主権力への抵抗は逃散・訴訟、時には叛乱に訴えることができたが、そのような伝統がない村では、抵抗は匪賊活動という形式を取ったことを明らかにしている (Langer 1987)¹⁹⁾。パトロンとクライアントの関係は、かなり複雑で流動的であって、特にパトロンの位置や重要性が植民地支配などで激変する場合、それに対する農民の反応は多様であって (Cf. Scott 1972)、匪賊もまた、いくつもの対応で選択しうる可能性を持つ。彼らは時にはまったくパトロン支配に入るし、時には複数のパトロンと交渉できる勢力を持つことで、相対的に自立した地位を獲得もできる (ベルナルやランピオンがそうであった)。直前に触れたボリビアのケースでは、匪賊たちはまったくパトロンの庇護を脱していたといわれており、マテ・コシードはどうやら一度もパトロンとのかかわりを持たなかったらしい。こうしたことはさらなる個別研究によって解明されるべき課題になっている。

ところで、19世紀アンダルシアでは、匪賊は最初のうち貧しい農民の側に立っていたが、やがて地方ボスの先兵になり、民衆抑圧の道具として機能するにいたるようになる (ブレナン 1967: 156)。このような立場の移動は、ほとんどがアンダルシアのような方向でなされるが、逆のベクトルもまたなかったわけではない。

匪賊と社会革命

これまでに述べてきた匪賊の両義性は、特定の政治的・社会的環境のもとでは、彼らを社会革命への合流へと誘うことになる。ただし、合流は稀なことだったし、ホブスボウムが強調しているように、その役割は決して大きなものではなかったし、革命運動に持ち込まれた匪賊流の生活様式は例えば中国では、毛沢東によってなんども「流賊的思想」として是正を要求されていた²⁰⁾。とはいえ、匪賊が社会闘争の一翼を担ったケースがまったくなかったわけではない。

19世紀メキシコに話を限定してみても、つぎのような例が存在している。おそらく匪賊から革命家へと華麗に転身したのはパンチョ・ビジャだが、彼についてはすでに多くが語られているので、ここでは省略しよう。

主にベラクルスで20世紀初頭に活動していたサンタノンことサンタナ・ロドリゲス・パラフォックス (? -1910) は、アナキスト集団だったメキシコ自由党 (Partido Liberal de México) と確実に接触していた。サンタノンにはなんらかの政治的傾向があったようで、

ジョン・ハートは彼が1910年にはメキシコ自由党のドナト・パドゥアのゲリラに合流してベラクルスとタバスコの両州で活動したことを伝えている（Hart 1978: 93）。彼の早すぎる死のおかげで、両者のあいだにどのような交渉があったのかを、私たちはほとんど知らないでいる。この自由党そのものは、バクーニンやスペイン・アナキストとのつながりを自覚して、みずからを公然と法外者だと宣言しており、ブラクセディス・ゲレーロは反乱する大衆を「屈しない匪賊の兄弟である賤民」と呼び、匪賊と呼ばれることに、むしろ誇りを抱いている。彼の同志リカルド・フローレス・マゴンもまた、「真の革命家はとりわけて無法者（un ilegal）である」と述べ、「私たち革命家は義務として無法者にならなければならない」ことを強調している（Bartra ed. 1977: 217, 229）。このように彼らはアウトローであることを自負しており、そこからサンタノンへの接触がはじまったのかもしれない。

エラクリオ・ベルナルルに関しては、彼を純然たる匪賊として扱うかどうかは、問題が残っている。19世紀後半のメキシコでは、市民であることと犯罪者（匪賊）であることとは、少なくとも支配的エリート層のなかでは対立的に把握されており、彼（まれに彼女²¹⁾）が匪賊だと認定されるときには、完全な犯罪者として処理される。しかし、ベルナルルがただの犯罪者などではなく、政治的な主張を持って活動した叛乱者であることは、しだいに明らかにされつつある。ベルナルルに関するこれまでもっとも真摯な研究は、ニコーレ・ヒロンのものだが、そこではたとえば彼の1887年の「コニタカ政綱」（Giron 1976: 78-80）への評価は低い。

しかし、その内容を詳しく検討してみると、彼がメキシコ自由主義の最良の部分を吸収していたことが判る。首都の移転や干渉なしでの総選挙、それに外国勢力の侵略に対する愛国主義や人民の統一は、ディアス独裁のもとでの通常の反対派の見解でしかないが、「国家第4の権力としての市町村会（los municipios）の樹立」や「死刑廃止」、さらには「人民への土地の譲渡」といった項目は、いまだに抽象的ではあっても、ベルナルルが社会変革についてのなんらかの路線を採用する中途にあったことを示している（Robinson 2009b）。この政綱につけられた声明（Proclama）において、彼はこう述べている²²⁾。

「力と欺瞞を握って共和国の運命を横領している連中は、私を匪賊だと呼んでいる。私はただ、彼らに素直に自分の命を差し出すまえに、身を守ろうと決心したにすぎない。……私についてなされているあれこれの評価など、たいしたことではない。すべての革命家は匪賊だと呼ばれてきたのである。だが、現在にいたるまで、私は略奪で富んだわけではないし、自分の家を共和国の金銭で満たしたこともない。」

19世紀も後半に入ると、なんにんもの匪賊が社会主義運動の影響を受け入れるようになる。匪賊活動が民衆闘争と密接に結びついていた場合に、それは特に顕著である。

ジェス・ジェイムズの兄フランク（彼はなぜか投獄を免れた）は1897年に、来るべき戦争は「資本と労働とのそれになる」だろうと主張したし、ヤンガー兄弟のひとりジェイム

ズ・ヤンガーは獄中で社会主義者となった (White 1981: 396)。ジェイムズ兄弟やヤンガー兄弟の活動は、南北戦争後の南部の経済的荒廃と、北部資本家の横暴な支配に対抗する民衆運動 (南部ポピュリズム) を背景にしており、フランク・ジェイムズやジェイムズ・ヤンガーのように後年になって階級闘争を口にする素地は充分にあったといえる。

ランピオンについては、彼と 1926 年には直接に対決する寸前までいったルイス・カルロス・プレステス (青年将校として叛乱を起こし、ブラジル版の「長征」を行っていた) が、のちにコミンテルン (共産主義インタナショナル) に彼を推薦したという話が伝わっている。実際には、プレステスはコミンテルン第 6 回大会 (1928 年) 以降のいわゆる「第三期」路線のもとでは、「民族主義＝ファシスト」の一員だとされていたのであって (のちに和解し、プレステスはブラジル共産党の書記長になる)、ランピオンとのあいだを取り持つなど不可能であった (Cf. Camarero 2011: 208)。ラテンアメリカにかかわるコミンテルンの方策の変遷については、旧コミンテルン関係文書が公開されつつあるので、いまだに確定的なことはいえないにしても、まずは伝説だと思われる。プレステス自身がルイ・ファコにランピオンと接触したことはないと言っている (Facó 1965: 183)、高名なカンガセイロとコミンテルンの関係は、完全な神話であろう。

アルゼンチンに移ると、マテ・コシードがいる。本名はセグンド・ダビド・ペラルタで、1897 年にトゥクマン州モンテロスで生まれる。小学校に行き、父の職業にしたがって印刷工として働く。当局と対立し、1918 年には窃盗で逮捕されたのがはじめて、なんととなく逮捕・投獄を繰り返したが、1926 年にチャコ地方に移動。チャコは当時、外国資本のもとでの砂糖産業と木材生産が、半強制的な労働によって営まれていた。マテ・コシードたちは友人・シンパたちに奪った金銭の再分配を行なうとともに、ほとんど外国資本にかかわる襲撃しかなかったため、「不正に対する復讐者」だと見られた。アナキストとの接触もあり、おそらく 20 世紀ラテンアメリカでもっとも純粋に義賊的な存在だったと思われる。1940 年には雑誌『アオーラ』に手紙を送って、みずからの行動の正当性を語っている。1941 年、彼は密林の奥深くに消え、パラグアイに移ったらしいが、以来消息が絶える (Chumbita 1991)。しかし、マテ・コシードやファン・パウティスタ・バイロレト (Errreguerera 2003) といったアルゼンチン匪賊たちは、明らかにホブスボウムのいう社会的匪賊の系譜に連なっている。アルゼンチンの近現代史を専門にするリチャード・スラッタが、彼らにまったく言及しないのは謎である。

中国革命では、匪賊出身だった賀竜 (1896-1969) が紅軍へと加わって毛沢東たちに接近し、人民解放軍の 10 大元帥のひとりにまでなったことは、特筆されてしかるべきであろう。

1959 年のキューバ革命への匪賊の参加は、いまだに謎に包まれている部分が多いが、フィデル・カストロたちが拠点としたシエラ・マエストラは「不法占拠」農民 (precaristas) が、長く大土地所有者たちと武器を取って戦っていた土地である。その農民たちを束ねてい

たクレセンシオ・ベレスは人殺しで80人以上の非嫡出子の父として知られた匪賊であって、シエラ・マエストラを熟知していた。彼が革命派についたことの意義は小さくない (Us-eem 1977)。

また、コロンビアでは、文字通り血で血を洗う抗争をつづけてきた保守党と自由党とが1962年に野合し、ともに自派の武装組織を見捨てて、彼らを軍と警察による弾圧に委ねた時期、自由派でもっとも政治意識が高かったペドロ・プリンコス²³は、昂揚する革命キューバに接近し、その影響のもとにさまざまなゲリラ組織を統合しようと試みていた。プリンコス²⁴が63年9月に殺害されたため、彼の試みそのものは消滅する (Sanchez & Meertens 1983)。しかし、流血を重ねていた内戦のなかで、キューバ革命との合流をはかった匪賊がいたことを忘れてはならない。ラテンアメリカでは、キューバの影響が全面的に拡大するとともに、米国を起点とする対ゲリラ作戦の洗練が進み、このためにいわゆる匪賊活動、つまり、集団的な武装行動は革命運動以外では衰えてくる。

以上は、ごく簡単な事実確認にすぎない。数多い匪賊が他人の財産の略取によって単純に現状を改善させるか、社会生活の向上を目指すことだけに身を捧げてきたことは明白で、その意味では社会的匪賊といわれる存在はきわめて稀であって、そのなかからさらに社会変革についての明確な目的意識を獲得できた例はさらに少ない。とはいえ、社会的匪賊と呼ぶに値する人々は確実に歴史に残っている。

また、自覚的な変革志向を持たないとしても、匪賊たちは変革の流れに介入することができた。一部の歴史研究者は、匪賊活動におけるドナルド・克蘭メイは少なくとも1987年の論文では、19世紀エチオピアでは農民は匪賊活動や叛乱にさいして、個々の寄贈の追従者として登場したにすぎず、したがって、そのような活動は「彼らには階級的意味がなかった」と述べているし (Crummey 1987: 135)、ファーニハウも、「抑圧社会に対する彼らの反抗は、これらのアウトローたちを社会的匪賊にたわけではない。なぜなら、わずかな匪賊だけがみずからの叛乱を階級用語で表現したにすぎなかったからである」という (Ferry-nough 1987: 163)。チャンドラーはブラジルのケースについて、「ランピオンは時には商人から奪った財を分配したし、望まない人々にはそれを受け取るよう強制さえした。彼はまた、街頭に集まってきた子供たちに、硬貨を投げ与えた。だが、農民とのあいだに階級的一体性はあったのだろうか。彼は農民たちとまるで一体感など持たなかったものであり、実際、彼の怒りの多くは、豊かな牧場主になる機会を否定されたと信じたことにあった」 (Chandler 1987: 102) と断定してさえいる。彼らはどうやら、階級的な意図や目的がはっきりと示されていない運動や活動には、いかなる階級的内容もないと素朴に思い込んでいるらしい。

マルクスは『資本論』になかで「彼らはそれを知らないが、しかし、それを行なう。」 (Sie wissen das nicht, aber sie tun es.) と述べていた (MEW 23: 88)²⁵。ヘーゲルもまた、「世界史においては、人間の行為を通じて、彼らが目指し達成しようとしたもの、知ってい

たり望んでいたものとは、必ずしも同じではないなにかが出現するものである。彼らはみずからの利害を追求するが、それとともに実現するのは、なにか別のものなのである。それは内的に存在しているものであるが、彼らの意識や意図のなかにはなかったのである (das auch innerlich darin liegt, aber das nicht in ihrem Bewußtsein und in ihrer Absicht lag.)」²⁴⁾ とい

い、さらに「直接的な行為のなかには、行為者の意志や意識よりももっと広範なもの (etwas Weiteres) がありうる」とも指摘している²⁴⁾。

ある行為が歴史的にどのような形式で開始され、その後どのように変容してゆくのかは、その担い手の「意識や意図」とは直接に関連するものではない。若きエンゲルスはブルジョアジーに対する労働者の反抗について、「ブルジョワジーに対する労働者の反抗は、工業発展のあとすぐに開始され、さまざまな局面を経てきている。……この反抗の最初でもっとも粗野でもっとも実りなき形式 (die erste, rohste und unfruchtbarste Form) が犯罪であった。労働者は窮乏と貧困のなかで生きており、別の人々が彼よりもよい暮らしをしているのを見た。金持ちのなまけものよりもずっと社会に対してつくしているのに、どうして自分がこのような境遇のもとで苦しまなければならないのか、彼には理解できなかった。さらにそのうえ、窮乏は財産についての先祖伝来の尊敬の念を押さえこんだ——彼は盗んだ」(MEW 2: 431) と述べるとともに、「工業労働者や鉱山労働者は、社会的状態に対する反抗の第一段階を、つまり、犯罪を通じての個々人の直接的反抗 (die unmittelbare Auflehnung des Einzelnen durch Verbrechen) を、すぐに乗り越えた。農民はまだ今日にいたるまで、いまだにこの第一段階に留まっている。彼らが好んでいる社会的戦争様式は、放火である」(Ibid: 478) と指摘している。アントニオ・グラムシは故郷サルデーニャでは「階級闘争は略奪、恐喝、森林の焼き打ち、家畜への危害、婦女子の誘拐、町村役場の襲撃などと、混同されていた。それは、永続的で有効な結果をとまなうことのない、初歩的なテロリズムの一形式で (una forma di terrorismo elementare) あった」(Gramsci 1973: 8) と『オルディーネ・ヌオヴォ』へのある寄稿文において述べている。はじまりはこのようなものだったのである。

窃盗や放火や誘拐が、単なる犯罪としてではなく、原初的な民衆の抵抗形式として採用されることは、世界各地で観察されうるのであって、そこにきわめて萌芽的な階級意識を見て取るかどうかは、それこそ研究者の知識と素質に基づくものである。匪賊が直接的に革命運動に加わることがない場合でも、また、革命綱領などまったく持たないでいる場合でも、それがどのように社会を揺り動かし、どのような社会的・政治的結果を実際にもたらしたのかを知ることこそが、意図や意識を云々するよりもはるかに生産的であろう。

19 世紀前半のペルーでは、自由派の匪賊たちが猛威をふるっていた。彼らにプリミティブな階級の本能が見られなかったわけではないが、それよりもはるかに大切なことは、彼らに脱走した黒人奴隷が大量に参加したために、奴隷解放への途が大きく前進したことである (Aguirre 1990)。歴史の進行において、ある出来事がなにを結果として生み出すのかは単純

な因果関係で説明などできないし、ましてや出来事の当事者たちの即自意識とは無関係である。匪賊研究はこれまで、膨大な個別事例の発掘に成功してきていて、そのなかで従来からの評価を大きく変更したことも珍しくない。だが、ホブスボウム以来、研究のもっとも基礎的な理論的基盤においていまだに飛躍がほとんど見られないのは、私たちの怠慢であろう。

注

- 1) 前稿を書いたあとに、日本語での匪賊関係の書籍としては、竹中千春『盗賊のインド史 帝国・国家・無法者』（2010年、有志舎）と、蔵持不三也の大作『英雄の表徴 大盗賊カルトゥーシュと民衆文化』（2011年、新評論）が出版されている。なお、日本では西洋的な意味での法外者を定めたような、明文化された規定は存在しないようだが、幕末に登場し跋扈した「悪党」と呼ばれる人々が、幕藩体制の法制度の外部に置かれ、殺害勝手だとされたことは（須田努『「悪党」の一九世紀 民衆運動の変質と“近代移行期”』2002年、青木書店）、注目に値する。また、律令国家においても、「群盗」には特別な処罰が用意されたことも（岡本堅次『浮浪と盗賊』1980年、教育社歴史新書）、あわせて考えてみたい。

さらに追加されるべき出版情報は、長年日本語版が絶版になっていた匪賊研究の古典中の古典、エリック・ホブスボームの『匪賊たち』が新訳されたことである（『匪賊の社会史』船山榮一訳、ちくま学芸文庫）。ただし、この翻訳は依然として初版（1969年）を底本になっているが、それには少々異論がある。ホブスボームはこの小さい著書にかなり愛着を覚えているようで、1971年と81年に改訂版を出し、2000年にはおそらく最後になるであろう第4版を上程している。この第4版にいたる過程で彼は初版の理論的な基本を保持しながらも、かなりの増補や変更を行っており、文献リストも一新されている。新たに翻訳をするなら、この第4版が底本になるべきであって、『純粋理性批判』や『資本論』のように今日あえて初版をそのまま訳出することにほとんど意義を見いだせないのである。

- 2) 本条項は、今日まで基本的に継承されている1917年憲法にも、一字一の変更もなしに、しかも同じ第29条として組み込まれている。
- 3) ナチス・ドイツのもとでのユダヤ人や、ソ連侵略後の悪名高い「人民委員命令」（Kommissarbefehl）、それにまだ終わっていないグアンタナモ等での「タリバーン」拘束などは、別個に考える必要がある。
- 4) このことを報告してくれているアントン・ブロックは、彼らがみずからの住居の近隣で活動していたがゆえの変装としか見ていない（Blok 2001: 33）。
- 5) もっとも処罰には地域的な偏差があったらしく、バッキンガムシャーなどでは法の厳密な適用は回避されていたという（Cf. Broad 1988）。
- 6) 少々バロック的な例を挙げると、1927年にペルーのカハマルカ地方で活動したアベリノ・バスケスは、軍事的な殲滅が困難なまでに勢力を蓄えていたため、地方副長官によって甘言をもって宴会に招待され、約束で非武装で宴会に臨んだ。バスケスたちは最初の乾杯を合図にして、出席していた将校たちに拳銃で制圧された。ルイス・テイラーによれば、バスケスたちのその後はこう記述されている。「副知事のモレノは無法者たちをどう処分するかを、町の人々に訊ねた。彼らは銃殺にすべきだという要求が出された。囚人たちはいっしょに縛られて、街頭を行進させられ、墓地に連れてゆかれた。儀式も僧侶の列席もなしに、アベリノ・バスケスは奥

の壁のまえに引き出された。彼の最後の望みは、若い息子の命は助けてくれというものだった。モレノ副知事はこの願いを受け入れたように見えた。匪賊たちはひとりひとり銃殺隊に直面した。恐ろしい光景にふるえあがって、メルセデス・パスケス「アベリノの息子」は逃亡を企てたがふたたび捕まり、泣き出して慈悲を乞うた。副知事は心動かされることなく、処刑の続行を命じた。ヒステリー状態になった若者は、ふたりの兵士によって両腕を上げられ、頭を撃ち抜かれた。モレノ副知事は拳銃を手にして、屍体のあいだを歩きまわり、とどめの一発を撃ちこんだ」(Taylor 1986: 109)。ついでながら、ジョン・ヒューストンが監督し、ハンフリー・ボガートが主演した映画『黄金』(The Treasure of the Sierra Madre, 1948)には、北部メキシコでの匪賊のこうした即決処刑の場面がかなり生々しく描かれている。このおかげであろうか、同作品はメキシコでは長く公開されなかった。

- 7) 彼の行動は、こう記憶されている。「チャベス・ガルシアの配下は、さまざまな犯罪の専門家だった。タカンパロ、ラ・ピエダ、ベンハモ、デゴジャード、コティハにおいて、チャベス部隊は略奪し、殺し、処女を犯し、夫の目前で妻を強姦するなど、さまざまな暴行を働いた。兵士たちと同様に、首領も楽しんだ。」(González y González 1972: 129-30)
- 8) とはいえ、近年の研究によれば、チャベス・ガルシアはただの凶悪無比な匪賊などではなく、まずはじめにマデーロの革命軍に合流し、マデーロの死後には、反カランサ派として独自の軍隊組織を持ってミチョアカンで活動したとされる。彼に敵対的な町や村には凶暴な措置で臨んだが、無差別の暴力を特徴とはしていなかったようである。1918年前半の最盛期には2500名の兵員を擁する大部隊の指導者であった。同年11月にスペイン風邪かベストで死亡。部下には多くの牧童が含まれ、そのこともあってか社会革命にはほとんど無関心で、ビジャヤサパタと積極的にかかわることもなかった。いまでは「原初的な社会的匪賊とあいまいに呼ばれるようななものか」に近いと評価されており、また、カトリック教会とのあいだに持った密接な関係から「クリステロス運動の先駆者」だともいわれている(Garciadiego 2010)。匪賊の多くは適切な分析にさらされることがなく、附着した特定のイメージからなかなか解放されない。
- 9) 米国では、ムリエタと並んで名高いメキシコ系匪賊に、テキサス警備隊との対決で知られるグレゴリオ・コルテスがいる。だが、ムリエタとは違って、アメリゴ・パレデスの優れた研究(Paredes 1958)から判るように、彼はしっかりと実在していた。
- 10) イエスに関しては、「彼が他ならぬ政治犯に適用される十字架に処せられた」(荒井献『イエスとその時代』岩波新書、1974年、p.194.)といわれているが、leistesはローマ帝国の秩序に対する叛逆者すべてを包摂していた概念であるので、このことばでは「政治犯」であることと匪賊であることとのあいだには有意的な差異は存在していなかった。つまり、イエスが匪賊として処刑されたのか、政治犯ないし叛逆者として十字架にかけられたのかは、少なくともローマの権力者にとっては問題にすべきことではなかったことになる。
- 11) ホブスボームはなぜかコリエンテスが金曜日に裁判にかけられたといっているが(Hobsbaum 2000: 47)、それは正確ではない。というのも、彼はすでに欠席裁判で死刑を宣告されていたので、逮捕・連行のあと、まるで必要でなかった裁判は抜きにしてただちに処刑されたのである。
- 12) フアン・チャベスは自由派との内戦で保守派のゲリラ匪賊となり、ついで第二帝政のもとでフランス軍側についた。彼の軍勢は1000名とか2000名の規模に達したこともあったらしい。ヴァンダーウッドは彼についてはまったく沈黙しており、私もイボラの論文(Iborra 1985)に接

して、はじめて彼の存在に気づいたにすぎない。

- 13) 『ヴィドック回想録』 三宅一郎訳, 作品社, 1988年
- 14) もっとも、ヘスス・アリアガは法外状態に置かれたことがなかったので、完全な意味では匪賊とは呼べない。
- 15) 『批評の解剖』 海老根宏ほか訳, 法政大学出版局, 1980年, pp. 47-9.
- 16) 彼らが匪賊生活に入る理由が、世界中どこでもきわめて似かよっていることに注目しておきたい。なんらかのライバル抗争によって家族を失ったり、身分違いの恋を妨げられたり、家族の名誉を汚されたり、社会生活で不当な扱いを受けたりと、驚くほど画一的なのである。確かに、コロンビアにおける「暴力」(la Violencia) の第2世代では、幼くして家族や親族を敵対勢力によって殺害された「暴力の子供たち」(los niños de la Violencia) が大きな比重を占めていたことは確かだが、そこでも全員が匪賊に身を投じたわけではない。もっと多様な理由が考慮されなければならないのである。匪賊への参加は、飢えをしのぐためとか、強制徴兵された軍隊からの脱出とか、単調で苛酷な日常からの逃亡といった、はるかに散文的な原因によっているのが通例である。しかし、伝説はこうした点でおよそ散文的ではない。それは「起源」をある仕方で付加する。ここで私たちとしては神話の系統的な形成過程においては「構造的に冒頭部に新しいものが付加されてゆくという形をとるものであるらしい」という西郷信綱の指摘を参照するに留めておきたい(『古事記注釈』第1巻, ちくま学芸文庫, 2005年, p. 115.)。つまり、匪賊が有名になると、彼の過去の生活や匪賊に身を投じるにいたった動機なるものを語る「冒頭部」が、従来からある出来合いのセットのなかから任意に選ばれて付加されるのである。かくして、マヌエル・ロサーダの場合、農園主の娘との許されぬ恋、彼女と手に手を取っての逃避行、農園側の報復としてのロサーダの母親への暴行、あるいはロサーダ自身の投獄といった物語が、フロイト的にいえば「事後的」(nachträglich) に構築されるのである。また、パンチョ・ビジャは辱めを受けた妹のために、匪賊への道を選んだといわれるが、それも同じであろう。著名な匪賊たちの法外者への転身についての語りがいたるところでしばしば驚くほど画一的であるのは、このためにほかならない。
- 17) この手紙は <http://www.migrationheritage.nsw.gov.au/> にある。
- 18) 残念なことにファーニハウの論文「エチオピアの匪賊活動を解釈する」は、まとまったかたちで発表されるまえに、彼の突然の死去のために公開されることなしに終わってしまった。ここではDonald・クランメイによる紹介(Crummey 2004/5)に依拠する。
- 19) こうした地域間の違いは、いまだに充分に研究されていない。数少ない比較研究のひとつで、ヘンク・ドリーセンは19世紀アンダルシアのふたつのアグロ・タウン(エステバとサンタエリヤ)を扱っている。エステバでは在地の地主貴族たちが相互に対立し、匪賊を雇って自衛と攻撃に利用していた。農民はパトロンとの緊密な関係にあったため、農民闘争には関係しないままであった。これに対して、サンタエリヤは匪賊活動の犠牲者だった。そこでは在地貴族がおらず、土地の多くは不在地主が所有していた。エリート層は外部世界と積極的にかかわり、土地なき農民たちに無関心で、後者はしだいに労働組合と政党に自己組織して、階級闘争へと向かったという(Driessen 1983)。ここでは地主層が土地に密着していたか、不在地主として農地の監督を代理人に任せていたかが、差異をもたらしたとされる。ついですが、このエステバという町は、匪賊の産地として古くから有名であった。すでに古代ローマの時代、当時はアスタバと呼ばれていたこの町は、活発な匪賊活動で知られていた(Caro Baroja 1990: 410)。

- 20) 毛沢東「党内のあやまった思想の是正について」(1929年)、『毛沢東軍事論文選』外文出版社、1969年に所収)
- 21) 女性匪賊については、ホブスボウムは『匪賊たち』の初版にはなかった「女性と匪賊活動」という非常に短い独立した「補遺」を加筆している(Hobsbaum 2000: 146-9)。現在では、ブラジルのカンガセイロたちに加わった女性たちについて、独立した研究がアナ・パウラ・サライヴァ・デ・フレイタスによって書かれている(Freitas 2005)。1938年にランピオンが愛人マリア・ボニータとともに惨殺されたあと、彼の衣鉢を継いだコリスコの女性同伴者ダダも、1940年3月に政府軍によって殺害されている。コリスコとダダは、グラウベル・ローシャの映画『白い悪魔と黒い神』(Deus e o Biabo na Terra do Sol, 1964)で重要な役割を演じている。コロンビアでのゲリラへの女性参加については、オルティス・サルミエントとドニ・メールテンスが触れている(Ortiz Sarmiento 1990: 203, 215-6; Meertens 2000)。インドの女性ダコイトだったプーラン・デヴィについては、竹中(2010)と、フェルナンデス(Fernandes 1999)を参照。
- 22) こうした声明に関して、ジョン・チャスティーンは「適切な『声明』だけが、叛乱側の暴力を政治的なものと定義しえた」として、そのような声明が発せられ、支持者たちがそれに応えて叫ぶことでだれもがこの儀礼のための昂揚した口調を期待したのであって、日常的演説からの距離は、リーダーたちが『リオ・グランデ人民万歳』といった感傷を叫んだあと、集まった支持者たちが絶叫する『万歳』と同様に、言語の儀式的特質を強化した。政治目的に対するこうした集団的な公的聖別化がなかったら、政府は叛乱者に『通常の犯罪者』だと烙印を押す機会により一層恵まれたことになる。」(Chasteen: 98) チャスティーンは支持者たちのまえでの声明発表を重視しているが、少なくともメキシコでは政綱や声明は新聞なりパンフレットなりを通じて公表されるケースが多い。
- 23) これは「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』」(ルカによる福音書 23.34)から直接に取られている。そこマルティン・ルターによるドイツ語訳では"Vater, vergib ihnen; denn sie wissen nicht, was sie tun!"である。
- 24) 『歴史哲学』序論

参 考 文 献

(第1部で掲げておいたものは省略し、雑誌や論文集の省略記号も前回のそれにならう)

Agamben, Giorgio

2003 *Stato di eccezione*, Torino: Bollati Boringhieri. 上村忠男・中村勝己訳『例外状態』未来社

Aguirre, Carlos

1990 "Cimarronaje, bandolerismo y desintegración esclavista. Lima, 1821-1854," in: *Bandoleros, abigeos y montoneros. Criminalidad y violencia en el Perú, siglos XVIII-XX*, ed. por Carlos Aguirre & Charles Walker, Lima: Instituto de Apoyo Agrario, pp. 137-82.

Álvarez, Gustavo

2007 *Mate Cosido, el bandido de los pobres*, Rosario (Argentina): Fundación La Capital /Prohistoria Ediciones.

Austen, Ralph A.

1986 "Social Bandits and Other Heroic Criminals: Western Models of Resistance and Their Relevance for Africa," in: Crummey, ed., pp. 89–108.

Barreto, Carlos Agustín

2007 "*Los Plateados en Morelos: bandolerismo en México durante el siglo XIX*," *Takwá*, Nos.11–12, pp. 105–29.

Bartra, Armando (ed.)

1977 *Regeneración 1900–1918*, México: Era

Blok, Anton

2001 *Honour and Violence*, London: Polity.

Broad, John

1988 "Whigs and Deer-Stealers in Other Guises: A Return to the Origins of the Black Act," *P&P*, No.119, pp. 56–72.

Camarero, Hernán

2011 "*El tercer período de la Comintern en versión criolla. Avatares de una orientación combativa y sectaria del Partido Comunista hacia el movimiento obrero argentino*," *A Contracorriente*, 8, pp. 203–32.

Caro Baroja, Julio

1990 *Ensayo sobre literatura de cordel*, Madrid: Ediciones Istmo.

Chasteen, John Charles

1993 "Fighting Words: The Discourse of Insurgency in Latin American History," *LARR*, 28, pp. 83–111.

Chumbita, Hugo

1991 "Alias Mate Cosido," *Todo es Historia*, No. 293, pp. 1–13.

1999 "Sobre los estudios del bandolerismo social y sus proyecciones," *Revista de Investigaciones Folclóricas*, 14, pp. 84–91.

Creechan, James H. & Jorge de la Herrán García

2005 "Without God or Law: Narcoculture and Belief in Jesús Malverde," *Religious Studies and Theology*, 24, pp. 5–57.

Crummey, Donald

1987 "Banditry and Resistance: Noble and Peasant in Nineteenth-Century Ethiopia," in: Crummey, ed., pp. 133–49.

2004/5 "African Banditry Revisited," *EnterText*, 4.2, pp. 11–36. [http://arts.brunel.ac./entertext/issue 4 2.htm](http://arts.brunel.ac./entertext/issue%204%20.htm)

Delpech, François

1991 "La légende de Pedro Carbonero: aspects mythiques et folkloriques de sa légende" in: Martínez Comiche, ed: pp. 107–21.

Driessen, Henk

1983 "The 'Noble Bandit' and the Bandits of the nobles: Brigandage and Local Community in Nineteenth-Century Andalusia," *Archives européennes de sociologie*, 24, pp. 96–114.

Erreguerera, Fabio

2003 "Bandidos sociales. Juan Bautista Vairoleto: mito y resistencia cultural," *Revista Confluencia* (Mendoza, Argentina), 1, pp. 1-19.

Facó, Rui

1965 *Cangaceiros e fanáticos. Gênese e lutas*, Rio de Janeiro: Civilização Brasileira.

Fernandes, Leela

1999 "Reading "India's Bandit Queen": A Trans/national Feminist Perspective on the Discrepancies of Representation," *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 25, pp. 123-52.

Fernyhough, Timothy

1986 "Social Mobility and Dissident Elites in Northern Ethiopia: The Role of Banditry, 1900-69," in: Crummey, ed., pp. 151-72.

Ferreras, Norberto O.

2003 "Bandoleiros, cangaceiros e matreiros: revisão da historiografia sobre o banditismo social na América Latina," *História* (São Paulo), 22, pp. 211-26.

Foucault, Michel

1975 *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Paris: Gallimard. 田村俣訳『監獄の誕生』新潮社

Freitas, Ana Paula Saraiva de

2005 *A Presença Feminina no Cangaço: Práticas e Representações (1930-1940)*, Dissertação (Maestrado), Universidade Estadual Paulista Júlio Mesquita Filho. Faculdade de Ciências e Letras de Assis.

Garcia, Javier

2010 "José Ines Chavez Garcia, ¿Rebelde, bandido social, simple bandolero o precursor de los cristeros?," *HM*, 60, pp. 833-95.

González y González, Luis

1962 *Pueblo en vilo. Microhistoria de San José de Gracia*, 2da ed., México: Colegio de México.

Gramsci, Antonio

1973 *Scritti politici II*, Roma: Editori Riuniti.

Grunspan-Jasmin, Élise

2001 *Lampião, vies et morts d'un bandit brésilien*, Paris: Presses Universitaires de France.

Hobsbaum, Eric

1972 "Social Bandits: Reply," *CSSH*, 14, pp. 503-5.

Iborra, Vicente Ribes

1985 "El bandolerismo en el centro de México durante la Reforma," *Quinto Centenario* (Madrid), 7, pp. 141-60.

Kea, Ray A.

1986 "I Am Here to Plunder on the General Road': Bandits and Banditry in the Pre-Nineteenth-Century Gold Coast," in: Crummey, ed., pp. 109-32.

Kerkyliet, Benedict J.

1979 *The Huk Rebellion. A Study of Peasant Revolt in the Philippines*, Quezon City: New Day Pub-

- lishers.
- Kooistra, Paul
1989 *Criminal As Heroes: Structure, Power & Identity*, Bowling Green: Bowling Green State Univ. Popular Press.
- Laclau, Ernesto
1996 *Emancipation (s)*, London: Verso.
- Langer, Erick D.
1987 "Andean Banditry and Peasant Community Organization, 1882–1930," in: Slatta, ed., pp. 113–30.
- Lewin, Rinda
1987 "The Oligarchical Limitations of Social Banditry in Brazil: The Case of the "Good" Thief Antônio Silvino," in: Slatta, ed., pp. 67–96.
- Loveman, Brian
1993 *The Constitution of Tyranny: Regimes of Exception in Spanish America*, Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press.
- Lüsebrink, Hans-Jürgen
1979 "Images et représentations sociales de la criminalité au XVIIIe siècle: l'exemple de Mandrin," *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 26, pp. 345–64.
- Meertens, Donny
2000 *Ensayos sobre tierra, violencia y género. Hombres y mujeres en la historia rural de Colombia 1930–1990*, Bogotá: Universidad Nacional de Colombia.
- Monsma, Karl, Oswaldo Truzzi & Silvano da Conceição
2002 "Solidaridade étnica, poder local e banditismo: Uma quadrilha calabresa no Oeste Paulista, 1895–1898," *Revista Brasileira de Ciências Sociais*, 18, pp. 71–96.
- Montoya Briones, José de Jesús
1972 "Manuel Lozada ¿líder mesiánico?," in: *Religión en Mesoamérica*. XII mesa redonda, México: Sociedad Mexicana de Antropología, pp. 587–91.
- Ortiz Sarmiento, Carlos Miguel
1990 *La violence en Colombie. Racines historiques et sociales*, Paris: L'Harmattan.
- Paredes, Amerigo
1958 *With His Pistol in His Hand: A Border Ballad and its Hero*, Austin: Univ. of Texas Press.
- Pérez, Adriana,
2009 "Bandits, Spies, Mercenaries or Traitors? The Counter-guerrilla of Manuel Domínguez and the Mexican American War (1847–1848)," <http://www.inter-disciplinary.net/wp-content/uploads/2009/08/perez@pare.pdf>
- Price, Patricia L.
2005 "Of Bandits and Saints: Jesús Malverde and the Struggle for Place in Sinaloa, Mexico," *Cultural Geographies*, 12, pp. 175–97.
- Ranger, Terence
1986 "Bandits and Guerrillas: The Case of Zimbabwe," in: Crummey, ed., pp. 373–96.

Robinson, Amy

2009a "Mexican Banditry and Discourses of Class: the Case of Chucho el Roto," LARR, 44, pp. 5–31.

2009b "Heraclio Bernal: Bandit Citizen," *Decimonónica*, 6, pp. 46–63.

Rodríguez Prampolini, Ida

2004 "El culto a Jesús Malverde," *Contrapunto* (Universidad Veracruzana, México), No.4, pp. 5–30.

San Juan Suárez, Carlos Federico

2010 *La santidad popular de los bandidos. El culto al Guachito Gil*, Tesis para optar por el grado de maestría, Universidad Nacional Autónoma de México.

Sant Cassia, Paul

2006 "'Better Occasional Murders than Frequent Adulteries': Discourses on Banditry, Violence, and Sacrifice in the Mediterranean," in: *States of Violence*, ed. by Fernando Coronil and Julie Skurski, Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, pp. 219–68.

Scott, James C.

1972 "The Erosion of Patron-Client Bonds and Social Change in Rural Southeast Asia," *Journal of Asian Studies*, 32, pp. 5–37.

Singelman, Peter

1975 "Political Structure and Social Banditry in Northeast Brazil," JLAS, 7, pp. 59–83.

Taylor, Lewis

1986 *Bandits and Politics in Peru: Landlord and Peasant Violence in Hualgayoc 1900–30*, Cambridge: Centre of Latin American Studies, University of Cambridge.

Tena Ramírez, Felipe

1978 *Leyes fundamentales de México 1808–1978*, México: Porrúa.

Thompson, E. P.

1975 *Whigs and Hunters. The Origin of the Black Act*, London: Penguin Books.

Useem, Bert

1977 "Peasant Involvement in the Cuban Revolution," JPS, 5, pp. 105–11.

White, Richard

1981 "Outlaw Gangs of the Middle Border: American Social Bandits," *Western Historical Quarterly*, 12, pp. 387–408.

ジェラルド・ブレナン

1967『スペインの迷路』鈴木隆訳、合同出版

竹中千春

2010『盗賊のインド史——帝国・国家・無法者』有志舎

蔵持不三也

2011『英雄の表徴——大盗賊カルトゥーシュと民衆文化』新評論